清明軍談

五

へ 13
2174
5

東洋文庫

遠 13 21
門 ヘ
番 2174
巻 5 止

清明軍談巻之五

○武龍元曄を救ふ事

流水の物くるる科又盈されど行ぞ君子の道に恥ぢ章は成ざれば達せざるとやいふ悪人をかしく殃ふ遺といへども修ふ天是を仰く悪人を勢ひ盛んなりと雖ども天終に是を滅ぼす元曄ぐんかをふ書を好き天命を知り賢人を憐み仁を施もて暴らざり況ふ朕ふ奸吏林達りんがあるを恐るるに因て新さへ没収をうくの由を出武龍ふ怒て大に驚き且怒つて曰く今清の政令をみだる上い下を虐げ奸吏い私欲を逞うもて石庚賈の主元曄ぐんい是を人行ぞ寛

仁大度みて和ふ勇ぐ且佞人を憎むの君子なるゆい
を以一度面会して是を知まり給るを奸吏林達さん寺の
実否を糺ぐ糺ぐ捕へて獄ふ下るのとろ〻ぐ〻を家を没収せ
しめて寺院ちまを義を乏くせざるゆ勇なるを我是を勵
けむんがあるべうらぐとして三ゆ藤人の部下を引連ねて林
平縣の廳ふ押寄四方を元者門を碎き塀を破り乗入れん
とて内安の者ふく林達さん大ひふ
驚きて行者を何の所以るゆい知らざれども幸急旅
が乳ちよ隙を窺へ打ちとふく具足を着ふ打うけ
偃月刀を携へ玄関ふ出廳内の勢に下知をろもちまに

清五ノ一

仕くく士卒済おくと引拵て組出て武能ぶも終下に
下知して奸悪を道の猛徒め片端より打殺ー府尹林達
らを搦め捕まと双方列ー戦ひる武能ぶが長い平
生馴る業ろまび奴戦を為く者一人もなく南を幸い
薙ぎる又林達さりんが士卒い歩中ろひ射ふ左平れ馴く
汚名を幸ー奴戦のお孫ー〻さま恐ーてよ之者
なく兵粮糧ぬる升りちり付林達さん大音を揚げ左
清の芝廳を駆まで門を破りく押入奴戦を震ふの天狗
通るべうぐる道賊めるく飛ふ伏ちべー洪武能ぶ是
を出て大ふ笑ひ天を対るどくい嗚呼ぐは汝我牙者ぞ

やゝ形勢ありしが武龍ぶりげん自ら科程して呉んと大ゑを振て立向ふ林達りん怒つて呉一刀と切付るかいくぐつて飛入何の苦もなく組伏られ仆と成て林達りんが士卒ども人と討ぢと群りうるを事ともせず林達りんと組敷ぢら生ける[illegible]を引抜て群がる中へ投付まへ押ふ打まくる六七人の泰例しふ並び伏せ仆ぶ[illegible]易して[illegible]侍ぞ武龍ぶりげん郎下勢へ廻んよ切伏突伏勇ましんで戦ふぞ林達りんが士卒爭ふ呉に敢もぐつき或い討ま或い死庭内多ち地ところ[illegible]昊おを多く得ら捕武龍りへ生捕し林達りんを後往久に

清五ノ二

為ひ屋敷下を引連獄屋のあふ到り及まび元曄げんと敵数多の科人と入替り武龍ぶり先獄屋を打破り元曄げんを救ひ出し[illegible]の科人悉く放ち出り又庭内の女童い[illegible]を[illegible]門へ長出し[illegible]の門くい郎下と[illegible]く警固せ[illegible]元曄げんが[illegible]を[illegible]書院[illegible]上座ふ出し武龍ぶり後ぐいつ[illegible]張乗ら[illegible]が扇ふ押入し強盗の主謀洪武綱りと[illegible]者也その物ふ者あんを[illegible]し仁と[illegible]都て我童と答無しぬつより事紀り飛ちくれ此獄ふ繋がれたまへ[illegible]没収きらまぬふ地ふり大ゑ驚き郎下を引具し強盗く[illegible]の法式ら者が安素の夫婦と[illegible]彼是

洪武龍府尹
林達が皮を
夜討朱元璋
を殺ふ事

なりとふ時に元曄涙を流し嗚呼義なるかな忠
ちうきび我好吏のあるを殺らしと食を断ちべからしと
義を重んじて赦ひ申る限り熱涙流るも忘れ
と言ふ時に武能の曰く彩公庭を犯さ上い今まも待
よ向のべし若い我賊塞を重へゆうん去るべう若よ麦相
あるく弱冬の人とも笑へ弱くい若ば出組の素性
とぬし・ゆらぐ又汁らふ忍さを能もあるん元曄の曰く
今へ何をう包まん我先祖い古明十四代唐王の落胤そ
唐王滅清ふ捨ると刑よ移るとぬふ王妃妊娠ろうしが
孔を避て蜀の四川の地よ逃を隠を行るく男子出生ば

まども滅清世ををく天下一統をれが世の咲へを保り王
胤ろうを浄く包を後ふあるく此地ふ移り数代武
勇よ変ろ・さを共その祖と子ぐ孫ふ今没収をるく居屋
敷の中央ふ浄き一丈の石ふ唐王の妃ふ占ぐき
初年よ代くの由結希しく徳めるる書初あり場出させ
拝系をよく生を解く浄うをれで武能ふ不遜邪下の
者を生りしく石の柱を場出し来りせ武能り内より
書初を取り恭くしく元曄あふ亜を元曄
よ向り是を用さ押載くく武能りみ木を此時武能
義ろう孫を祝賀首して復ぐ去を祝ー生く思惟

して中枢、秦先達てく廣東府より少華へ拘引る賊徒を
奪ひ去らんとする所の浙江用化山の手負伯玉ぎくとり
女賊主兄と奪ひんと数多の終下を従へ秦が勢に打ち掛り
途中に於て挑戦ひしが楽も方丈不遠の豪傑その上
不思議の妖術ありて秦既に楽が為に一命を絶ちんとする
時に伯玉ぎくが中なる白い毛の明の如き毒蛇ぐんが猛く
ぐ飛九仙山まで吳人の出会しに会ひ明恢復の英主
紀らん汝能兄と問くべしと云ふに秦大義を懐く
と切し事業ぶ我と絶て兄を問ひんと中なるより秦
遂に承諾し聞く盟とあって別きに今君の仰を待へ

合ひれば幾ばくの方ならざる大明恢復を成せの英主し世の後
も父祖の仇を修ふ天を戴ぐとが中山よい君公を変し
恢復の義兵を起しぬく先達伯玉ぎく張道弘ぐ秦と
三人の終下をんち復しをくより合義を始め
小華を攻入んと易くべしと元曄を考ふ清の井改
を浮く悪しき打掛に我が才も彩る憂国ふ変ひいよく清を怨
むる公源えれが武能ぶりを勧め兄天の時到まりと内心い
大ふ悦ぶく兄ども武能ぶりを伯庭を探らんあ慧と
皐下して曰く先人の勧め波兄を残りと兄ども我家へ
久しく民ろよ来く石庚賈人の名を影ろ上不法の素

僅に王胤たる事を表し義兵を起さんと謀る處人民
の紛擾を受て衆皮し然るを省ぞ大義を全べきを顧く
痛を求るのみならんや之を始めとし徐洪大量の人數我為に
羅に陥んと謀逆の言葉に武龍新にそう敷し天の
時は地の利に如ず地の理は人の和に如ずと今清は政を乱
し民を暴虐し既に君を弑して下を勤く從ふ計らず此節に
及べり是則ち天の時也用化山に李伯玉張道弘ら
等あり邱山には桑あらく雲中を横行し山川廣野および
海邊の要害地を踏捨し是を掌の中にしん是地の理を得
る也君元より流人と憐ミ如かが加ふる子の民父母の如く

慕ふ事も赤子の如く是人の和也天の時を得て大業を
なさんとする事勿論にて爰に孫く元曄海西に於て食を
言葉を改めて後ち孫ん深く此上は是よりを経て義兵
を起さん忠勤を竭し我を助けよ先此度後が功を賞し臣ハ王
道の約束として字を元華と改むべしとの旨申されば武
龍大ニ悦び苟しくも某が綸言を拝受し唯へ字の
一字を賜る上は孫二心なく身命を抛ち忠を盡しまうん
願くは殿下の者たへも此洞を下されるべき難ろんと鄭
金龍翟璜徐經らへ赤を始め殿下欲すと呼出し在の
趣をくを申して朱元曄に告ましむ元曄洞て

汝等大勢を率て人馬の旨を速に皆く蠢紙繻子旨を
洪武龍下和して硯を高麗とす人を上古所懐復
の英主不安堂に白伯玉張道弘を遣へ
と則ち恭元璋しゅんが書と扇を妻細の口上とも中倉
鄭金翟旗の夫人を用化山へと強させる

○李氏強氏潭州を強ふ強系の
郎該用化山の主張李伯玉国中麻彦流約を府法
人を動け人を懲け考ふ大義と金と懲る所を先生
小系より討ひとして寧武曲れいぶが向へと雄る
五十多くの勢具を清く恢べと兵ども山上に詩

向へべし詩あるべその後へとるさでい叶ふほど」と郎下の内
和別る者数多を断江福建の西へ分ち行く荷擔の人
数を集む打ち廣東郎山の主張洪武龍より使
として鄭金翟旗に強ふ跨り白泡陰を用化の
山寨に強来る李氏りの郎下見を乃く武龍ぶりが使者
たるを知る系より詩よの和んなんと強龍と
岩向既に放さんとする時鄭金ふくも見を寨へ
武龍ぶりが李氏りと強寨へる所の刺符をるく見上
り李氏りが郎下見を乃く大に怒り擔より乃ふ細を
用山鄭金へさく云ふ秋くい洪武龍ぶ郎下の者

ちりはてゝ書生人〻一大事を告るの後着ゝ狭袍羽戟
を収めて由書生人〻ゝ連〻あへと大音よばはりて是
を開く門を開き柳天寥ゝ書彼剣箱を請て
て書氏ゝ示すと告ぐ書氏ゝ是を改め別ち法武能ふ
りと云ゝ別箱にあるを見て書生を使者を遣ゝ
と柳天寥ゝ示す命じて鄭金程璜の両人を審
みるべき書伯玉ゝ書使を付けて細を問ふ両人答へ
て我主孫慶西隋の豪家へ押入り時に主都て我くに
酒肴をもてへ仁義を能ゝ義量寛仁大度ゝて多
の人ふあるべきゝ移嘆ゝくに至ゝに何ぞ計ん是ゝ

彼の豪家の主府尹ふ捕ゝ獄ゝ家流ふ没収せられ
書生の死ふ陷入ゝと嘆ゝ是を救ひ難ゝ義ゝ勇を
ゝ仰ゝと我ふ為ゝ彼を屈ゝ押寄の府尹林逢
を生捕る人数ゝ或ゝ討死又ゝ門卒へ是ゝ豪家の主
を獄ゝ殺ゝ書ゝ人の由緒来歴を糺ゝ場ゝ
左明寺九代唐王の落胤ゝ朱華ゝ字ゝ元曄ゝ
唐王の末ゝ中ゝ出ゝ明爵銀ゝ且ゝ家業天
下の主ゝ南ゝ一位書生人ゝ取り屋ゝ英王ゝ
ゝと知ゝ符合ゝ武能ふ恢復を勧めゝ
即ち主従の契約を固ゝ義兵を揚ゝ一変ゝ兵号ゝ人

元曄が使者用化山ホ
来つて右明恢復の事
を書氏に告ぐ事

も急ぎ得あらんべし 列侯大将よりの書を以て
恭々しく先出をば李伯玉 張道弘と共に
で祖父を文を白く

先朝十六代天啓之時愛親覺羅従滿州起而二十代至
永暦悉滅之統中華而世既九代是朕舊敵也剩今
上極驕使奸曲之吏虐万民万民已迫飢餓清之悪行天
焉免之哉朕受天命與汝等共舉義兵殲滿清而報祖先
之冤改虐政於善政欲撫育万民汝等風來而助我大義
可盡國忠也

庚戌三月

朱元曄

李伯玉 張道弘

李伯玉張道弘天を恭しく悦ぶの涙りなく鄭金
の程撰の友人を尋ぬ答礼元曄が使者小紹
下を尋ぬ李伯玉張道弘の旨を差し得あり為の書
氏より張氏に渡お渡しく郎下の者なる右の旨を
せ方明恢復のことを願ふ清の苛政を万人の悩む所
李氏より軍勢を使役する日に懐け来りて来たれば
漸江の者をより我先に張集り日を務めて硫小七万
を得ようと安ようと行く李氏より手紙のの差あるのと

撰ばせ給て源氏の一族を尋召て御所の金
銀財宝武器及び米粟等の軍用を分け持せ給ふ
大明獲の大幟を押立て源あさ臣て熊野を見
て人々を振むること源氏に勝れ給へり
蓋勝て東伯玉の軍を至へ又い力を揚ぬ壮
者の味方に加り宛も風ふ靡く草の如く廣西源あ府
ふ四ふ財い軍勢十万に及びる既て源あ府の
棟梁縣の此方ふ陣を布き東伯玉の張道ふ陣の
あ人ふ勢僅を引き先浩武能ふ兵今能ふ
やりむとを若ぐ武勢出を人使ふ朱元璋

ふ拜を〜む人僕ぐ奏〜ふ我くい先能原悲の
民の未爾ふ〜て久〜く民万ふ乃ども酒清の粟を食
ひ物ふとふ〜ぞ残ふ清の苛政ふ〜く万民を苦しむ
悪き物卒義兵を起し清を伐くを明の世り恢復し民を
安んぞんを切りふ帝ふ称ふ今君恢復の大業を全て
あつふさ弛ふ怠べきの此奉書を拝見〜忍恍の知り見に
使く兵人ふ軍勢十万を率く来ると述べれば朱元
璋ふ喜悦ふ余ぐ由緒来歴い武能ふ
妻く宥り元来先能忠臣の末裔ふ〜て用ん仕と
二心なく忠勤を尽べ平定能ふ奈神妙なり皆府使

たべ〳〵みそれで支人をあ縫さ者を接謝して已が陣和
ゆるさるり

○潯陽府に於て軍評定の事

去程に為元曄と紐めて恢復の主さしめ洪武龍
李伯玉張道弘の場を合て二十万餘人
廣西潯陽の内府に元海より叛のうさに
南つく平南城あり堀を盧朝陽はりて大ひに
張さ平遠小亀へ出を作しびさまるを仕立亜亜亦部隊
高友に一万餘騎を接けく潯陽を討しむ高友一万の
軍勢を引て北向へ三十里おくて陣を洪武龍

清五千二

と寄て自ら八千餘人の逆兵を引率して出て奪ひ火
箭迎農臼擂天地を傾く半途に押寄て矢戦ふ高友
が先陣を打掛る武龍が陣よりも
衣の大角一連に発し鉦鼓を打て出て戦ひ
高友が先陣一泊りもなく左注に敗走を後
陣を代らんとすれども方法なして道狭く先陣の逃
走るに崩げられ共崩まと武龍が長槍
に切立てまび足し合さんとする術なく平南さして
逃る武龍智謀ある者なれば是を推て兵
を引取潯陽に元曄が大軍実の勢を

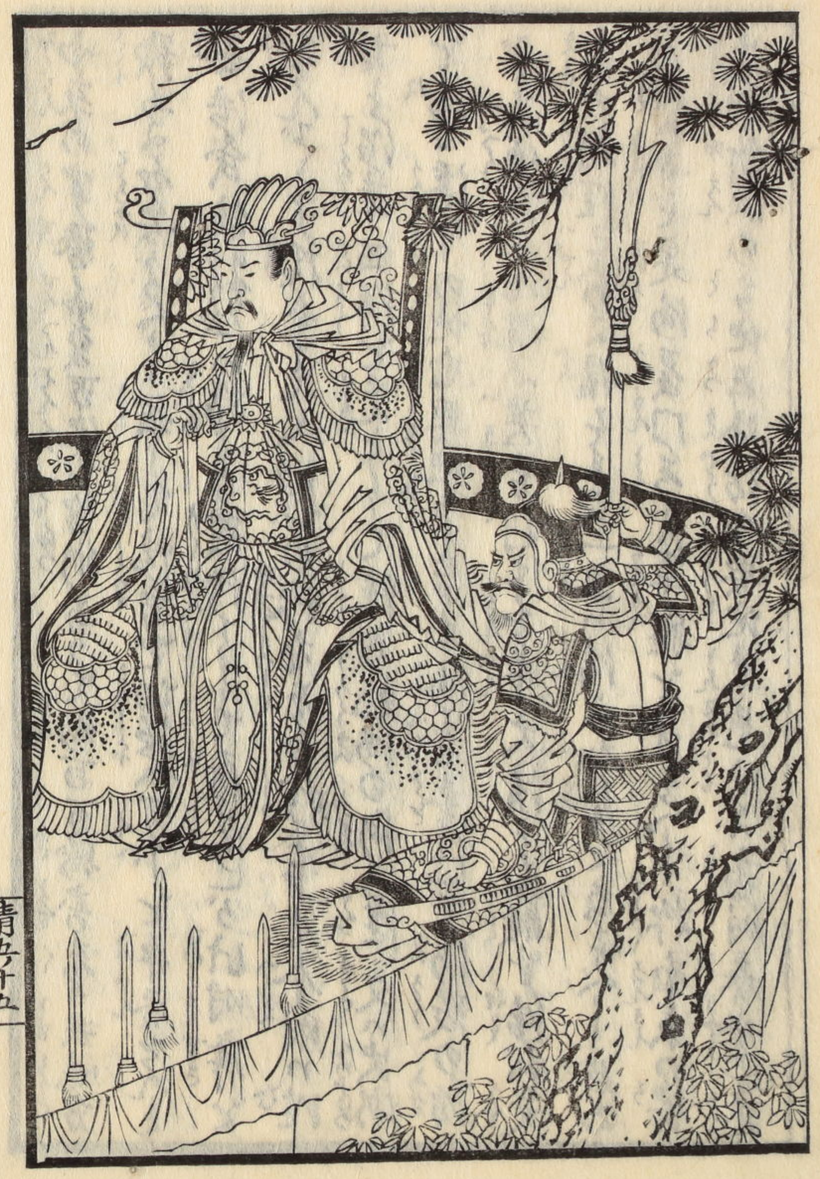
奏し給へ元曄父子姑の合戦に十分の務功あるを
悦び武能が功を賞し給へ武能奏し申す
るは倭寇今日の合戦を利あると雖ども尚地
の要害全うして危角日を移さば必ず法國り
命じ大敵押来るふ和らぐ務の理是来る[illegible]
り[illegible]氏[illegible]なるを軍綱浮[illegible]と奏す
元曄[illegible]も是を若くし[illegible]事氏しあるを[illegible]軍綱浮[illegible]
とする席[illegible]朱元曄[illegible]右の衣冠を[illegible]たりの
座上洪武能右の座上に書伯玉[illegible]張道弘[illegible]
[illegible]下柳天羅[illegible]凍連[illegible]辛軒[illegible]鄭金[illegible]翟漢

[illegible]徐[illegible]名[illegible]時元曄[illegible]詞を発し今軍
[illegible]集り[illegible]勢ひあるを[illegible]れども[illegible]所に要害の地ふあるべ
[illegible]坂の塞[illegible]なり[illegible]要害の地を築きいづまの
地より戦を始めん汝等[illegible]るあるべく軍綱[illegible]と[illegible]時張
道弘[illegible]倭寇[illegible]世上の人[illegible]清を怒むる
者多く我等漸[illegible]南[illegible]恢復の義
を[illegible]て法人を悦び[illegible]て二万騎の軍勢を
[illegible]ら[illegible]人の和をもつて押[illegible]何ぞ[illegible]の金[illegible]を
[illegible]平南協[illegible]合戦を始め法[illegible]を[illegible]
[illegible]北京を攻入清帝の首を引提[illegible]国家の安寧を永

さんと勇ましく演ら柳天羅りうえんの曰く往昔あるを
初むるを歎びあるを以て名とせり例あり然あらんは漢中
府を吉陽の地とし王都を定め法方を攻平らげんいうふ
こゝ孝伯王りくくの曰く天の時地の理人の和い是三徳の
具足し天の時い既う侍らう地の理を撰むるり行要ちうは
漢中府い往古より名相の都せり場所あるを漢中の
地い穀函を左り隴蜀を右り三面岨つく武を用ゆるの
地一往昔漢の高祖い法良ぐ勧めうて此地ふ都をトて
大漢四百余年の基を建つ後ろ此恵撃を率て磨る歓
塚い攻義し或い説く降らしめ漢中に至く王都を築ぐ

少系の軍勢ふ三変万化の智術ありて何百万騎寄来る共味方
我ら如安うるべし我し法方を切落く下を平呑さんと
云法武能りぶい始ろう我行しして居らしぐ此時摩を
ちんぐ中絶事丈人りんの仰恐なら待まども今時い往
古と沿華西洋と先しして法あ航海の術ふ達又い火術
を海る漢中の地を要地ろまども海を幸しして海疑の防
ぎ不使なんん説ふ英吉利も年大清と和睦を結び交
易の利益ふ求ふ信ちまべ一旦い清ふ加勢とろうべし然あ
る時いあぞ定海夏門を軍艦と寄るべし抑南京の地い
先朝新以の古地上海防の要地丈是共ふ南府奏業と建

朱親王南京を
ふるく年号を天
德と建清の降
ねと敗を号


清五十五

ゑ不支那全面の経営に専心し後不日海一統し明の志を唱
へ漢中に移るべしと云へば元璋
はこれを聞き「生ずる時」と云へば元璋
は此言を見て海陸洪武能の策智を感服し俘
虜一変し「それば直ち不軍を発せば」と海清の咸豊元年
右明恢復の檄数百本を作成の大旗を押立潯州を立て南
京を攻入んとて又軍令を正し「金銀財宝を掠め婦女を
犯す者の孔明の軍法に倣ひ一人首を刎ん」と厳禁の部を
陣々へ通達し「威義整々」として乃ち
○後明用奏の事
既不軍隊一変し「それば洪武能」を大元帥とし廣西潯

州を押出を先陣を張道弘三万人第二に柳天龍
第三に鄭金の右翼三万人第三翟横陳連三万人
第四に本陣朱元璋親ら徐経幸軒を従へ六
万人後陣を李伯玉五万人洪武能に第元璋
しゅうの本陣不ぶく右翼を右左不知を恵勝二十万
人軍威盛んに右明の旗幟風に靡き廣西潯州を出陣
し廣東福建江西を従へ或い打て出て敗走し或い
降参し又い右明恢復を悦び来り加るもあり
大軍野に充満山に海に押行く恰も人なき所を行ぐ
勢ひ破竹の如く故郷なれば江西饒州の巡撫諸

元宗、之清の去るを聞きて、勇猛なりけるを嘆く
所後、之を親しむ。之清、西に押来るの地を
海へ、これを急ぎ軍勢を催して、五万騎を二手に分け
一手は自ら鄱陽湖に軍船を連ね、一手は紹下の大船を所
々に配して、紹干萬年の地に陣を張り、往来
朱元璋、しゆげんが出でを張道弘、三万人押来り、鄱陽湖
の付方に、湖水の揺るを見て、向ふの岸なる軍
船数百隻を連ね、陸戦の備へあるを、所々の者ども
ちらぬ旨を大元帥、浩武龍に告ぐ。武龍、
「下知なくば味方の湖水を渡らんこと、如何
清五十七

冥しく欲を深て欲私をして、海辺に計策を設け張
道弘の三万人を、海辺に押寄て、陣を鄭金
の三万人を右の方翟英の三万人、左の方の支流に埋
伏させ、張道弘が軍勢を能く待つべき平地にして
あしらめ、味方の内より知る人、弱る兵数十人を撰び出し、浩師の
ひいきの人に仕立て、欲深へ入せを流言して、早く廣西の筆の勢
南京を攻入んと、氏なき東まども南国巡撫の手に歳く
湖面に、軍船の設けあるべし。元より軍船なき廣西勢、海
辺に行て、日を送り、今の勇猛撓を衛り、早く踏ん今
不意を攻付び廣西の大軍一度にもみるほど若討ぞ、て日

と延さんを濃の都くを打殺ち筏を組ぐ渡らんの文
文と[illegible]佐ある時いひ氏が国務言んうさ[illegible]と[illegible]
是武藤が浦く君臣ちー諫し[illegible]ものまくも故ねが元宗
が耳へ入らくれば先好度を平ーく疑りーむりよ文
殺よ理伏ー張道弘が使への疎ちうとの孤り孤ぬり
て劣と若ぐ趙元宗[illegible]是と受き皆ー思惟ー撰とよ
と拍く清智うる故の結様や我故の使へちうを信ー押
ぎうう能と殺さんべー[illegible]味方多ふ寡り是討い伏兵
とんく吟路と引切く我が清と襲ん清ちうう我い
故ねの掘伸ふ入ぎと思ぐ[illegible]ものも遠うう[illegible]機

を楽をうい百銭百務[illegible]今故の清斗の義を対伏兵
共よ務のごく打崩ー城主の首と貫ん幸は一戦ようり通
今捕ぞ名ーて今帝の法威ふ[illegible]ものも共よ後代ふ誉
と務ぞべー上洛せば一ものいおの故よ烈ーく南り二ものい
左右よ多き理伏の故機と[illegible]ふ討べーー軍縁と[illegible]
きうよ教百艘の軍艦と一連よ使へ西南の岩ふ抑寄狭炮
毒多と打掛まば張道弘が[illegible]の勢い右陣左陣ふ無[illegible]
趙元宗の軍機扱こと皆一図よ上洛ー三ものい
一ものい[illegible]の故よ烈ーく南り二ものい左右の使[illegible]ふ面も
ううぐ寄べうり鄭金[illegible]翌換ものの[illegible]陣ふ思い掛うく

切鋒を指揮して敗走を請元宗に揉砲手振り
軍いよいよ彷徨るぞ是程に苦しと狂も烈しく是
討を洪武帝い夢と清りし」と敬べ先より万番と入
蒙く敬方の軍議動静を中しひろく巣を遠べ請元
宗い恵勢して呂今押寄るの旨を若ぐ此時武龍
を掛天羅ふ向い我清汗流を申ろ此途を知ぐべ
うぐ先より汝ふ命で一番り急き計らふべ」と下知を
なを掛天羅ふ一番に逆兵二手後へ後を繰て
遠ふ湖水の赤を打渡し敬の本陣を襲へ入歩ふ大を樹
鏡波を嘆と揚ろ此陣ふ掛り止まる玄率い老麿ふい

清五ノ九

歩役ふ南り」猛兵のころまべ之見ものく知れるこの時
請元宗を烈しく戦ひ乱ぐ風と後を彫まべ湖水
を渡し我本陣ふ大氣炎くと之宅り間の勢り逆ろこと
ゆまべ敬い反間の策計に落入さるうと安全の眼歯ぐこと
本陣を救りもんべあるべうべと湖岸をさして引返を武龍
ぶりふ知を伝くさ敬の本陣い味方を申く安れうり陸ふ
ある敬勝を急く鄙湯湖の水屑と」軍艦を奪へと猛兵
急ぐ切之まべ請元宗ぐ軍勢い艦ふ乗移ふ敬ものく
掛りしく攻ふ討ろさ始りの戦勢ぐ仰も射ぐ湖く小舟
を奪ううぐ僥あさして敗走以又陸のぐ行千万ぐ

人の事伯玉が一よみ万人まで能向ひ多所清へ何
の多数を率く打ち掛り安二を二に攻ふまべ多所
苦率必死と敢く戰へども元より智勇猛士事伯玉
が旗先に南り雄く珠の子を殺ちが如く敗走を乱く水
清の二ちより猛軍の後を追ふ武能ぶ
下知して奪へ〳〵敵の軍艦あ乱ち安くと鄱陽湖
を打渡り樂平縣の地あて事伯玉が勢と一ちに成
一日士卒の疲労を休め翌朝抑天龍小二方の勢
と授け饒州を押へさせ残る十八方を三ちに分く南京を
天府石城地を押ふの三方より經兵急ち攻ふまべ城ねたる

勝ちき一戰ちて及び城を拔き〳〵蔡矢ちり朱元璋〳〵望
を〳〵逢〳〵ふれば城中に入く要害を堅め士卒の疲労
を休め兵大飛候の儀式あれとて吉日を撰ち清武能
事伯玉張道弘を始めて残りを系に
白るを数〳〵く天を多り黒牛を殺して地を祀り清武能
と大元帥と事伯玉副元帥張道弘
中郎將と定能是を進して惡く皮を授け朱元璋
と朱規王と称し年号を後明の天德元年と建る不思
議なる吉日南京石城上に紫の雲棚引演るの繁華
なり是古清水謂ゆる國家南を統らんとあ兆祥矣あり

とゝ是等の事を云ふべし幸流と定まりぬれを急と石紙
誠を降遠りて王邦と図し朱親王即位あるく後明
天德帝と号奉し奉りぬ清の風俗衣裳を改め古明の
改ふ復古べし又降系の者ハ免し歌對者ハ悉ち小付と云
向べきの旨國中に布告を見て依て清を怨るの諸侯へ
怪んで降系清に忠ある者ハ此の事を小弟と称へ軍勢を
為し中華勿ち二つに分き騎都大方ちらぶて

清明軍談卷之五 大尾

是より韃靼も北方より蜂起し大清の国漸々の勢
と競ひ豊臣清黒龍江と攻入く天德帝に属し又
英吉利清と接けく戦ふも武勇智勇赤伯王が
妖術に恐怖しく後明小清り清の帝王咸豊帝
自ら投降を乞く数度の大戦終に利なくして北京
都の陥まぐ面白き矢合り移流宮矢帰の事
情和佛の霊験あると方今の中華の流を濃
こゝ北しく後篇こして嗣て發兒

4